

山本竟山の書と学問－湖南・雨山・鉄斎との文人交流ネットワーク－

申請区分

研究促進費（共同）

実施期間

2017年8月1日～2018年6月30日

実施代表者

関西大学・文学部・教授・陶 徳民

実施分担者

関西大学・文学部・教授・中谷 伸生

関西大学・文学部・教授・米田 文孝

関西大学・外国語学部・教授・奥村 佳代子

泰山書道院・院長・大橋 成行

京都国立博物館・研究員・呉 孟晋

台湾明道大学・助理教授・香取 潤哉

成果の概要

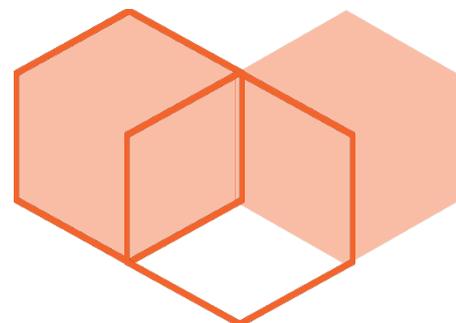
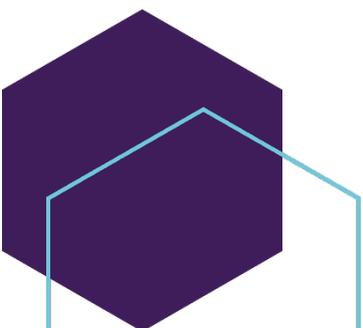
本研究は、近代日中文化交流の代表事例としての1913年（大正2）に京都で開催された「蘭亭会」に発起人として参加し、東アジアの学芸的伝統を担った書家の山本竟山(1863-1934)および彼と親交のあった歴史家の内藤湖南(1866-1934)、書画家の長尾雨山(1882-1942)および文人画家の富岡鉄斎(1837-1924)の足跡を関西大学から世界に向けて発信することを目的として実施した。2013年（平成25）には関西大学の博物館と図書館で、「大正癸丑蘭亭会百周年（おおさか）記念－近代日本における翰墨の盛典－」を開催し、書や絵画や文房具、書簡などを展覧して内外の高い評価を得た。今回の企画では、それを引き継ぐやり方で、「山本竟山の書と学問－湖南・雨山・鉄斎との文人交流ネットワーク－」と題して、関西大学図書館が所蔵する内藤湖南文庫に含まれる竟山関係の資料、山本家の遺存資料および京都国立博物館・鉄斎美術館の関連資料を調査研究し、それらの名品を一堂に展覧した。また、関西大学のルーツである泊園書院との関係で、1913年（大正2）の蘭亭会に発起人の一人として参加した藤澤南岳の事績をも顕彰した。

この展覧会事業は、山本竟山についての全国で初めての企画として、2018年（平成30）4月1日から5月20日の約2カ月間にわたって関西大学博物館で開催し、入館者数は約3,000名であった。また、2018年（平成30）4月28日には国際シンポジウムを開催した。中国の篆刻専門の学術団体である西泠印社の理事と副研究員を招へいし、それぞれ特別講演・基調講演をしていただいた。講演や円卓発表を通して、日中の研究者らが山本竟山の業績やその影響について活発に議論する機会となった。書道家等による即席揮毫等、多彩なプログラムでの実施であり、参加者は約200名であった。企画実施の結果、



山本竟山の孫の山本宗生氏から数多くの絵画・手紙などの資料が関西大学博物館に寄贈され、国際シンポジウム当日には、関西大学芝井敬司学長・米田文孝博物館長に、山本宗生氏から寄贈作品リストが手渡された。今回の企画については、毎日新聞社のメディアにも新聞紙上で取り上げられ、関西大学のアジア学を全国にアピールする機会を得た。

代表者の陶徳民及び副実施代表者の中谷伸生は展覧会、シンポジウム準備・運営の総括、分担者・米田文孝は博物館企画の調整、分担者・奥村佳代子は展覧会の図録製作を担当した。また、展覧会での出品作品の選定・交渉、シンポジウムの企画にあたって、分担者であり書家の大橋成行、中日書画史家の呉孟晋、竟山の研究者である香取潤哉を中心として実施組織の全員で協力して決定した。



実施成果

〔雑誌論文〕 計（ 4 ）件 うち査読付論文 計（ 0 ）件

（著者名、論文標題、雑誌名、巻、発行年、最初と最後のページ、査読の有無）

1. 陶徳民、山本竟山の中国デビューと清末の金石学—書名題字「鉄雲蔵陶」の機縁について—、山本竟山の書と学問—湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク—展覧会図録)、1、2018、10-13頁、無
2. 中谷伸生、山本竟山を取り巻く絵画的イメージ—吳昌碩、富岡鉄斎と東アジアの近代文人画—、山本竟山の書と学問—湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク—展覧会図録)、1、2018、14-16頁、無
3. 奥村佳代子、久保天随と『漢語辞彙』をめぐる—山本竟山と同時代を生きた中国文学者—、山本竟山の書と学問—湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク—展覧会図録)、1、2018、20-22頁、無
4. 吳孟晋、「陳老蓮画蘇長公像」について—長尾雨山関係資料のなかから、山本竟山の書と学問—湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク—展覧会図録)、1、2018、23-25頁、無

〔学会発表〕 計（ 0 ）件 うち招待講演 計（ 0 ）件

（発表者名、発表標題、学会等名、発表年月日、発表場所）

〔図 書〕 計（ 2 ）件

（著者名、書名、出版社、発行年、総ページ数）

1. 山本竟山の書と学問実行委員会（代表：陶徳民）、山本竟山の書と学問—湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク—展覧会図録)、関西大学博物館・東西学術研究所、2018、76
2. 陶徳民、中谷伸生、米田文孝、奥村佳代子、大橋成行、吳孟晋、香取潤哉、山本竟山の書と学問、株式会社 ユニウス、2019、印刷中

〔出 願〕 計（ 0 ）件

（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

〔取 得〕 計（ 0 ）件

（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

林原美術館所蔵資料の総合的調査－岡山池田藩藩主の文事と岡山の文化を探る－

申請区分

研究促進費（共同）

実施期間

2017年12月1日～2018年11月30日

実施代表者

関西大学・文学部・教授・山本 登朗

実施分担者

関西大学・文学部・教授・乾 善彦

関西大学・文学部・教授・田中 登

関西大学・文学部・教授・山本 卓

奈良大学・講師・中尾 和昇

林原美術館・主任学芸員・植野 哲也

林原美術館・主任学芸員・橋本 龍

成果の概要

本研究の期間内の目標の一つとして、市民にも開かれた研究成果の発表会を、林原美術館との共催という形で行うことを考えていたが、下記のように、シンポジウム「林原美術館の資料と岡山池田家の文事－お殿様と王朝文化－」を開催した。当日は芝井敬司関西大学学長、谷一尚林原美術館館長にもご参加いただき、一般市民約200人が来場した。まず冒頭に、以前から林原美術館の調査を行っていた東京大学史料編纂所の藤原重雄准教授、ノートルダム清心女子大学の原豊二准教授に講演と報告をしていただき、それに続けて、これまで重ねてきた我々の基礎調査に基づく三種の調査報告を行って、最後にそれらをふまえての討論を行った。

日時 平成30年9月16日（日）13時～16時30分

場所 岡山県立図書館多目的ホール（岡山市北区丸の内2丁目）

挨拶 関西大学学長 芝井敬司氏

林原美術館館長 谷一 尚氏

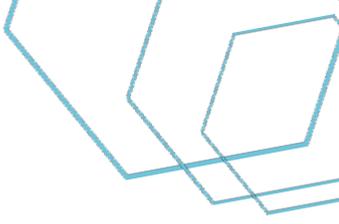
講演 林原美術館蔵古筆手鑑の『明月記』断簡 東京大学史料編纂所准教授 藤原重雄氏

報告① 池田光政筆の和歌集 - 『風葉和歌集抜書』と『射山百首和詞』 -

ノートルダム清心女子大学准教授 原 豊二氏

報告② 池田光政筆「古筆臨模聚成」の意義 関西大学教授 田中 登氏

関西大学非常勤講師 中葉芳子氏



報告③ 和歌の学びと交流 –池田綱政と広島藩・浅野綱晟–

関西大学非常勤講師 福留瑞美氏

報告④ 池田綱政の文事 –『伊勢物語』屏風断簡、艶書合五種その他–

関西大学教授 山本登朗氏

シンポジウム パネリスト 谷一尚氏、藤原重雄氏、原豊二氏、田中登氏、福留瑞美氏、

司会進行 山本登朗氏

また、我々の調査の成果をふまえて、林原美術館では、下記のような特別展が行われ、数多くの来場者があった。

特別展「王朝文学への憧れ 歌、物語に染まる、もののあはれ」

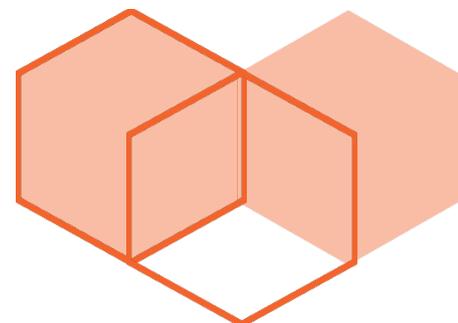
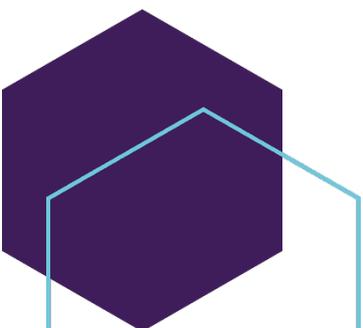
平成30年9月15日~11月4日

このように、今回の研究では、数度にわたる資料調査をふまえて、その研究成果発表の場を設けることができ、また、林原美術館との間の、信頼に基づく相互連携の関係も構築することができた。今後も続けられるであろう調査・研究のための、ひとまずの基盤は、今回の研究によって作り得たと考えている。

代表者および分担者は、数度にわたる資料調査に参加し、多くの知見を共有して、上述の成果発表に至ることができた。

シンポジウム「林原美術館の資料と岡山池田家の文事–お殿様と王朝文化–」については、山本登朗と田中登が報告者・パネリストとなったが、山本卓、中尾和昇、乾善彦は、他の登壇者との連絡・調整を担当し、また林原美術館の植野哲也、橋本龍とともに、このシンポジウムの企画・立案・準備を、責任者である山本登朗に協力して行った。

特別展「王朝文学への憧れ 歌、物語に染まる、もののあはれ」は、林原美術館の植野哲也、橋本龍が担当し、関西大学の山本登朗以下5人のメンバーが協力して、力を合わせて準備に当たった。





実施成果

〔雑誌論文〕 計（ 1 ）件 うち査読付論文 計（ 1 ）件
（著者名、論文標題、雑誌名、巻、発行年、最初と最後のページ、査読の有無）

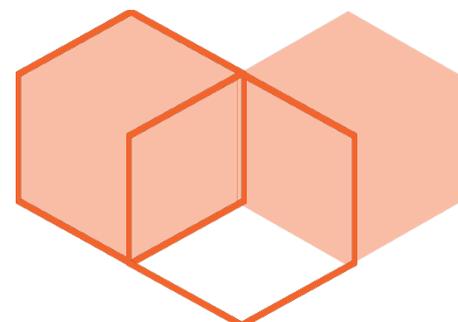
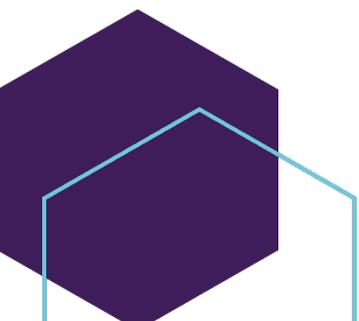
1. 山本登朗、乾善彦、田中登、山本卓、植野哲也、中尾和昇、橋本龍、林原美術館所蔵岡山池田家資料が語るもの—調査報告—（仮）、関大国文学、103号、2019、投稿予定、有

〔学会発表〕 計（ 0 ）件 うち招待講演 計（ 0 ）件
（発表者名、発表標題、学会等名、発表年月日、発表場所）

〔図 書〕 計（ 0 ）件
（著者名、書名、出版社、発行年、総ページ数）

〔出 願〕 計（ 0 ）件
（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

〔取 得〕 計（ 0 ）件
（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）





アートを適用した新たな科学研究・教育の情報発信に関する研究

申請区分

研究促進費（共同）

実施期間

2017年8月1日 ～ 2018年7月31日

実施代表者

関西大学・総合情報学部・教授・林 武文

実施分担者

関西大学・総合情報学部・教授・堀 雅洋

関西大学・総合情報学部・教授・ノーマン D. クック

関西大学・総合情報学部・教授・井浦 崇

成果の概要

本研究は、情報の可視化とコンテンツ開発を通して、サイエンスアート分野における新たな表現手法の創出と社会貢献を目指したものである。具体的な科学技術の対象として、素粒子物理学を応用した巨大構造物の透視技術「ミュオグラフィ」を取り上げ、そのアウトリーチ活動における情報発信と効果の検証を行った。得られた成果としては、情報学分野のコンテンツ研究の成果のみならず、地域の芸術家の参加による新たな創作拠点の形成と啓発活動、古墳のミュオグラフィ計測による考古学分野への貢献など今後の展開方向も見出すことが出来た。主な成果を以下に記す。

(1) 情報の可視化とコンテンツ開発

3次元CGを用い、ミュオグラフィの計測原理や計測結果を説明するための可視化コンテンツを開発した。コンテンツは、AR(拡張現実感)技術、VR(人工現実感)技術、プロジェクションマッピング等の最新のIT技術を用いた展示を行い、来場者に対する注意と興味を喚起させる効果があることをアンケート調査により検証した。

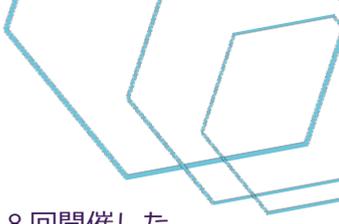
(2) メディアアート表現の創出

ミュオグラフィの観測データに基づいて、火山の内部活動をモチーフに、展示会場に映像と音響を生成して芸術空間を構成するインスタレーション作品を制作し、一般に向けた展示を行った。本作品で開発したサウンド生成システムを基に、メディアアート分野の芸術作品『tamakagiru』が多摩美術大学美術館の委嘱を受けて制作され、同美術館の特設展「宇宙に訊ねよ」にて展示された。

(3) 芸術展の開催と地域の芸術家を集めた活動への展開

ミュオグラフィをテーマとし、情報コンテンツ、メディアアート作品、立体錯視、学生の絵画作品、

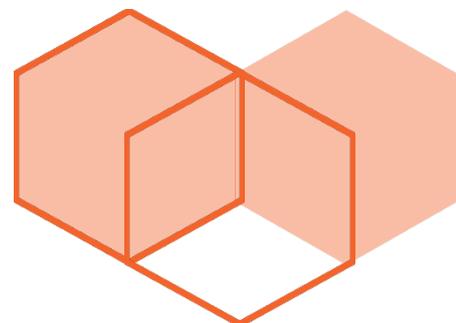
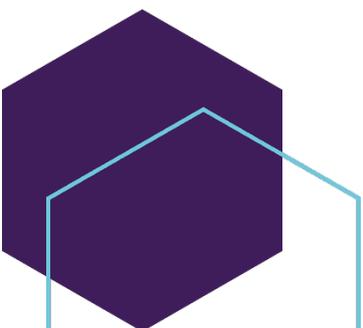




地域の芸術家による芸術作品の展示を近畿圏と関東圏で 2017 年度に 5 回、2018 年度に 8 回開催した。現在では、本プロジェクトが地域の芸術家による創作活動拠点となり、地域における啓発活動を展開するに至っている。

(4) 古墳のミュオグラフィ計測と新しい考古学研究の提唱

上述のコンテンツ開発とアウトリーチ活動を通じて古墳計測の可能性をアピールした結果、実際に、関西大学の考古学研究者、高槻市や堺市の関係部署、東京大学地震研究所などとの共同事業として、2019 年度より活動を開始するに至った。



実施成果

〔雑誌論文〕 計（ 7 ）件 うち査読付論文 計（ 1 ）件
（著者名、論文標題、雑誌名、巻、発行年、最初と最後のページ、査読の有無）

1. 林武文, 高野智幸, VR を視聴するデバイスとしての HMD の現状と展望、映像情報メディア学会誌、73(1)、2019、20-24、有
2. 井浦崇, 林武文, 火山の内部活動をモチーフにしたインスタレーション、関西大学総合情報学部紀要「情報研究」、48、2018、73-84、無
3. 林武文, 横田歩見, Norman D. Cook, 逆遠近錯視を利用した立体サイネージの研究—プロジェクトマッピングによる錯視オブジェクトの開発—、電気学会 電子・情報・システム部門 知覚情報研究会資料、PI-18-42、2018、11-16、無
4. 林武文, 堀雅洋, 井浦崇, 平尾修悟, 全天球映像と球面ディスプレイを用いたインタラクティブコンテンツの開発—古墳をテーマとした地域連携事業への展開—、電気学会 電子・情報・システム部門 知覚情報研究会資料、PI-18-15、2018、41-46、無
5. 井浦崇, 林武文, Muography Art :火 山の内部活動をモチーフにしたサウンドインスタレーション、電気学会 電子・情報・システム部門 知覚情報研究会資料、PI-17-102、2017、11-16、無
6. 林武文, 堀雅洋, N.D.Cook, 井浦崇, ミュオグラフィを題材としたメディアアートコンテンツの開発、電気学会 電子・情報・システム部門 知覚情報研究会資料、PI17-075、2017、19-22、無
7. T.Hayashi, K.Sumiya, Visualization of Cultural Heritage and Interactive Contents: In Case of Osaka, Proceedings of Japan-Egypt Joint Workshop on Visualization of Cultural heritage: New Scientific Approaches (Muography and Informatics)、Muography and Informatics、I、2018,41-45、無

〔学会発表〕 計（ 5 ）件 うち招待講演 計（ 2 ）件
（発表者名、発表標題、学会等名、発表年月日、発表場所）

1. 兼久美穂, 林武文, ミュオグラフィを題材としたプロジェクトマッピングの制作、電気学会 電子・情報・システム部門 知覚情報研究会ポスター・デモセッション、PI-18-PD06、2018.6.3、大阪（グランフロント大阪）
2. 横田歩見 N.D.Cook, 林武文, プロジェクトマッピングによる逆遠近錯視オブジェクトの制作、電気学会 電子・情報・システム部門 知覚情報研究会ポスター・デモセッション、PI-18-PD04、2018.6.3、大阪（グランフロント大阪）
3. Takefumi Hayashi, Muography Art Project, Muographers2017 General Assembly, 2017.10.2, The Embassy of France, Tokyo
4. Takefumi Hayashi and Kenji Sumiya, Muography Art Project at Kansai University and its Future Prospects, Muographers 2017 Workshop, 2017.10.3, The Prince Park Tower, Tokyo
5. 林武文, 井浦崇, N.D.Cook, 堀雅洋, ミュオグラフィを題材としたメディア・アートコンテンツの開発、平成 29 年度電気学会知覚情報研究会デモセッション、2017.9.3、大阪（ナレッジキャピタル）

〔図 書〕 計（ 1 ）件

（著者名、書名、出版社、発行年、総ページ数）

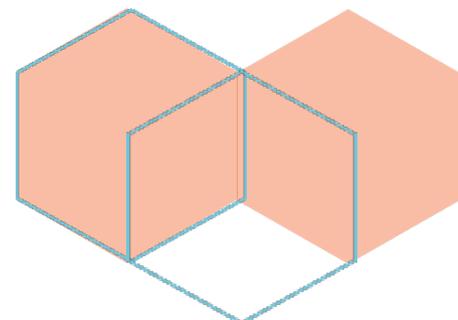
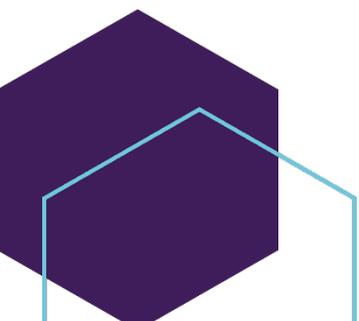
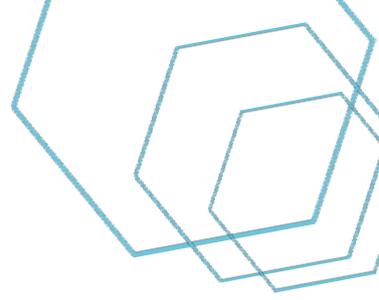
1. 林武文, 井浦崇, N.D.Cook, 田中宏幸, 中島裕司, 角谷賢二、Muography or Visualism in the 21st Century、秋田活版印刷、2017、130

〔出 願〕 計（ 0 ）件

（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

〔取 得〕 計（ 0 ）件

（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）



危機に対処する法と政策 – その寄与と限界 –

申請区分

国際シンポジウム等助成金

実施期間

2017年10月18日 ～ 2017年10月19日

実施代表者

関西大学・法学部・教授・葛原 力三

実施分担者

関西大学・法学部・教授・飯島 暢

関西大学・法学部・准教授・水野 吉章

関西大学・政策創造学部・教授・後藤 元伸

関西大学・政策創造学部・教授・西澤 希久男

関西大学・政策創造学部・准教授・権 南希

関西大学・政策創造学部・准教授・松元 雅和

成果の概要

本シンポジウムの目的は、日本、韓国及び大国の法学・政策学研究者が国際的かつ学際的な視点から他分野にわたる情報交換を行い、危機の克服のために法・政策が果たしうる役割とその限界を探る足がかりを得ることにある。

本シンポジウムでは、その目的に基づき、下記のとおり基調講演、特別講演を開催し、分科会では訴訟法、民事法の分野で報告及び活発な討論が行われた。

【第1日目(2017年10月18日)】

第1部 基調講演

李(イ) 炯珪(ヒンギュウ) (漢陽大学法科大学院長) 「グローバル経済危機の克服と会社法の変革」

第2部 特別講演

呉(オ) 允(ユン) (漢陽大学法学研究所長) 「経営危機企業の退出をめぐる関連税制の課題」

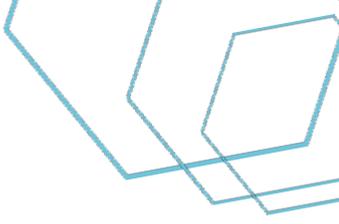
討論者 浦東 久男 (関西大学法学部)

第3部 分科会第1部 訴訟法

第1分科会

朴(パク) 燦(チャン)運(ウン) (漢陽大学法科大学院) 「捜査手続における弁護人立会権」

討論者 山名 京子 (関西大学法務研究科)



第2分科会

韓(ハン) 忠洙(チュンス) (漢陽大学法科大学院)

「紙を使う訴訟と紙を使わない電子訴訟－葛藤と調和、そして克服可能性」

金(キム) 次(チャ)東(ドン) (漢陽大学法科大学院)

「民事訴訟における証明程度と行政訴訟及び刑事訴訟との比較」

討論者 亀田 健二 (関西大学名誉教授)

【第2日目(2017年10月19日)】

第4部 特別講演

ティティラット・ティップサムリットクン (タマサート大学法学部) 「インターネットガバナンス」

討論者 崔(チェ) 泰鉉(デヒョン) (漢陽大学法科大学院)

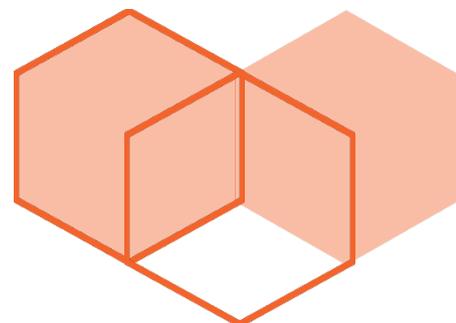
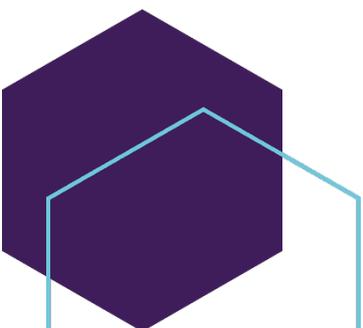
第5部 分科会第2部 民事法

第3分科会

宋(ソウ) 鎬煥(ホヨン) (漢陽大学法科大学院) 「韓国における非営利法人の危機と法政策的改善案」

後藤 元伸 (関西大学政策創造学部) 「日本における非営利法人に関する法体系」

討論者 李(イ) 道(ド) 局(グック) (漢陽大学法科大学院)



朝鮮半島における軍事的緊張についてのリスク分析的検討：リスク分析学のアジアにおける新展開と地域性と多様性の融合に向けて

申請区分

国際シンポジウム等助成金

実施期間

2018年3月13日 ～ 2018年3月14日

実施代表者

関西大学・社会安全学部・教授・土田 昭司

実施分担者

関西大学・社会学部・教授・斉藤 了文

関西大学・社会安全学部・教授・永松 伸吾

関西大学・社会安全学部・准教授・元吉 忠寛

関西大学・環境都市工学部・教授・山本 秀樹

静岡大学・学術院工学領域・教授・前田 恭伸

成果の概要

2018年3月13日に朝鮮半島における軍事的緊張が高まる状況において、ミューズキャンパスにおいてリスク分析学(risk analysis)の立場からこの状況を検討する国際シンポジウムならびにセミナーを実施した。

東日本大震災を経験したことにより、日本では想定外のリスクに対処する研究が強く望まれるようになった。この国際シンポジウムならびにセミナーでは、多くの国、地域のリスク分析学の地域性や多様性に焦点を当てることができたことから、想定外のリスクに対処する研究についての示唆も得られた。特に、戦争やテロあるいは戦後復興の課題をリスク分析学の観点から討議することは、朝鮮半島における軍事的緊張が高まっている状況において有意義であった。

リスク分析学は、安全研究の中でも、自然災害、多様な人為的事故、食品安全、環境汚染、保健衛生など、ほとんどあらゆる対象について、工学、理学、医学、法学、経済学、経営学、社会学、心理学など多様な学際性のもとに、統一的に論じることができるきわめて一般性の高い学問分野である。この国際シンポジウムならびにセミナーのパネラーは、日本、中華人民共和国、大韓民国、台湾、ノルウェー、アメリカ合衆国と活動・居住する地域も多様であっただけでなく、その専門分野も安全心理学、リスクガバナンス、都市計画学、公衆衛生学、医学と多様であった。

国際シンポジウムでは、パネラーはそれぞれの立場から、戦時になった場合の一般住民の集合行動の予測、戦時における民衆にとってのリスク最適化問題、核物質が大気中に放出された場合の公衆衛生上のリスク評価、あるいは、朝鮮半島における政治・統治の歴史的経緯など、高度に多角的な視点から、リスク分析学が寄与できると考えられる諸問題について指摘した。



さらに、セミナーでは、これらの諸問題についてパネラーだけではなくフロアーからの質疑応答を交えて深く討議した。

なお、この国際シンポジウムならびにセミナーにおいては使用言語を日本語と英語とし、この 2 言語間の同時通訳を行ったことから、学生も積極的に参加することになり大きな教育効果をあげることもできたと評価できる。

